

美味は、隣の食卓に学べ。

ベルギー (1995年・16か国目)

旅の楽しみのひとつは、ご当地のおいしいものに会おうこと。レストランでは、周りのお客さんが食べているものと同じものを注文することが、美味に出会う秘訣です。これまで出会った一番の料理は食の都ブリュッセルで食べたムール貝。注文すると60個くらいのムール貝が大きな鍋に入って出てきます。まず、そのボリュームにビックリ。口にする、パセリとセロリが隠し味の絶品のスープ。味にもビックリの逸品でした。



ぼくの後ろの白い服の女性は2人前のムール貝(100個以上)を注文していました。

オーロラどころじゃなかった…。

グリーンランド(デンマーク領) (2009年・100か国目)

記念すべき訪問100か国目は、友人のご夫婦といっしょに訪れたデンマーク領グリーンランド。旅人の憧れであるオーロラを見に出かけたのです。しかし、さすがは北極圏、気温はなんと流れる川も凍る-30℃。室内との温度差50℃という過酷な世界です。寒さに弱いぼくは、オーロラどころではありませんでした。淡い緑色の光が夜空をひらめきますが、美しさよりも寒さ…。のんびり観測なんて出来ませんでした。



どこまでも続く雪と氷の白い世界は、人類を寄せつづようとしません。



100か国目の記念は北極圏。旅人憧れのオーロラ観測を選びました。

空飛ぶ車イス、ほんとうに空を飛ぶ。

ネパール (2005年・61か国目)

ネパールの第二の都市ボカラはヒマラヤが周辺に見られる風光明媚な保養地。新婚旅行で訪れました。ここでは、プロペラ付グライダー滑空を楽しみました。標高7000メートル級のアンナプルナ連峰やマチャプチャレが目前に迫ってきます。ネパールで1週間滞在して使ったお金は150ドル、グライダーに乗るには1時間で1人191ドル。少々贅沢ですが、「神様になった気分」になるには安いものでした。



横並びに乗るこの機種は、乗客も操縦することができます。



神々しい山々に近づけば、「神様になった気分」になります。

あのメジャーリーグを笑わせた。

アメリカ (1993年・1か国目)



NYヤンキーススタジアムにて、イチローと松井との初対戦。長嶋茂雄氏も来ていました。

初訪問から10年後、2003年に社会人のぼくはアメリカに留学。休暇を利用してアリゾナ州へメジャーリーグのキャンプ視察に出かけました。お目当てはシアトル・マリナーズのイチロー選手。彼はカートに乗って登場。「ICHIRO!」という歓声が沸く中、ぼくは女子高生のような甘い声で「鈴木くん」と声を掛けました。さすがにこれには、スターも大爆笑。周りの人たちは「なんて声を掛けただけ?」「すごいね」と称賛。ぼくも得意顔でエッペン。

白い世界と高山病の幻想

ボリビア (2007年・72か国目)

旅で死にかけた経験もあります。チリからウユニ塩湖を経てボリビアに抜けるツアー。標高4400メートルの温泉で、調子に乗って泳いだら菌が体内に入り、高山病と相まって体調悪化。ハイライトであるウユニ塩湖に着いた頃には意識朦朧。夜行列車とバスを乗り継ぎ、首都へ移動したときに幻想を見て路上でダウン。親切な警察官に助けられ、9日間の緊急入院。病院でのスペイン語は大変でした。



はりきってはいってしまった標高4400メートルの温泉。



白く美しいウユニ塩湖は、生き物が住めない死の世界でもあります。

世界110か国を訪問!

選りすぐり車イス世界旅行記 byきーじー

車イスでも旅行がしたいでも、飛行機や電車、バスはどうしよう…。トイレはあるのか?ホテルに泊まれるのか?そんな心配ばかりが先立って、自分は旅することができないと思いがちではありませんか。旅という素晴らしい非日常体験を最初からあきらめないでください。人は誰でも慣れと度胸、そして少しの智慧で、どこにでも行けるものです。その証拠を私“きーじー”こと木島英登が皆さんにご案内。1993年のアメリカ旅行以来、18年間に110か国を巡ってきた経験と情報の一部をここでお伝えします。車イスの人を含め、どんな人でも旅行を楽しむことができる一助となれば幸いです。皆さん、どうか夢をかなえてください。

木島氏がサイトに登場しています。NTT西日本ルセント「ドリームアーク」<http://www.dreamarc.jp/>

月の砂漠でラクダに揺られ…。

モロッコ (2005年・60か国目)

新婚旅行で訪れたモロッコでは、サハラ砂漠のラクダツアーを体験しました。夕方、ホテルを出発して砂漠の真ん中にあるテントで一泊し、朝日を見て戻ってくるというもの。ラクダに乗るから車イスは必要ないだろうとスタート地点に置いて行きましたが、車イスが手元にならないうちに1泊2日間。携帯電話を忘れて出かけたような落ち着かない気分。いや、肉体の一部がないような不安感。そんな非日常も旅の魅力。ドキドキの開放感に興奮しまくりました。



乗りやすい一番大きいラクダを用意してくれました。



ぼくは砂丘に登れないので、この砂漠の夕日は妻が撮影しました。

トラックで合唱しながら48時間。

マダガスカル (2006年・69か国目)

すし詰め状態のカミオントラックバスに揺られること48時間。マダガスカルでは道なき道を進む旅を経験しました。パンクやぬかるみで立ち往生…などトラブルは4~5時間に一度の頻度で発生。夜になると辛い道中に耐えるため、女性たちを中心に大合唱がはじまります。自分たちの好きな歌をいっしょに順番に歌っていくのです。

ぼくも「ふるさと」を歌いました。この一体感に支えられ辛い旅を続けることができました。



旅のゴールでは、雄大なバオバブの木が歓迎してくれました。



老若男女100人ほどが、すし詰め状態で乗り合うカミオントラックバス。

象の道は、王の道

カンボジア (1999年・32か国目)



どこまでアンコール・ワットの本堂に近づけるか。地元の少年たちが手招きしてぼくを呼びました。車イスでもそばまで行ける道を案内してくれるというのです。それは、知る人ぞ知る抜け道。かつて王様が象に乗って入ったといわれる「象の道」でした。その後、少年たちは本堂の回廊まで車イスを担いでくれました。彼らの親切のおかげで、ガルーダや阿修羅など仏教にまつわるレリーフを満喫することができました。

木島 英登(きじま ひでと)

1973年大阪生まれ。高校3年生のとき、ラグビー部の練習中に下敷きとなり、第11胸椎を脱臼圧迫骨折。脊髄を損傷。以来、車イスの生活に。神戸大学1年の夏、1か月のアメリカホームステイをきっかけに旅にハマる。現在まで18年間で世界110か国を訪問。そのほとんどが一人旅。7年間の広告会社(株)電通勤務を経て、バリアフリー研究所を設立。講演・執筆・コンサルなどを行う。著書に、「空飛ぶ車イス」(「空飛ぶ車イス」)「空飛ぶ車イス」(「空飛ぶ車イス」)がある。2011年、NPO法人Japan Accessible Tourism Centerを設立し、訪日外国人へのバリアフリー旅行情報の提供を開始。

バンジージャンプにトライ!

ニュージーランド (2008年・90か国目)

ニュージーランドは最も好きな国のひとつです。この国では、まずトイレに困ることがありません。どこにでも車イスで入れる大きなトイレがあるのです。そんな障がい者を特別視しないお国柄だから、バンジージャンプもOK。バヌアツの成人儀式を世界で最初に観光アトラクションにしたカワラク橋。ここでぼくはバンジージャンプにトライしました。全身ハーネスを装着して、43メートルからジャンプ。ラスベガスで断られたスカイダイビングの雪辱を果たしました。



高さ43メートル。15階建てのビルの高さに相当します。



極度の緊張感の中、掛け声とともに谷底へジャンプ。

空飛ぶ車イス、木島英登氏プロデュースのイベントです。

誰もが!自由に!行きたい場所に! ビッグ・アイ トラベルサロン. 10月7日(金)・11月4日(金)・12月2日(金) 17:00~相談タイム, 18:30~勉強会. 国際障害者交流センター バリアフリープラザ. 事前申込不要. 旅行が好きな方なら誰でも参加可能.

学ぶ!楽しむ!つながる! ビッグ 愛カフェ. ペーカリー・カフェで地域の人に喜ばれるパンやコーヒーを提供している障がい者がいます. 11月3日(木・祝) 14:00~17:00. 国際障害者交流センター 愛カフェ.

human note x 瑞宝太鼓 コラボレーションコンサート. ウタのタネ in ビッグ・アイ. 11月23日(水・祝) 開場:16:00 開演:17:00. エンディングで2曲を一緒に歌ってくれるメンバーを募集します.

Present i-co読者プレゼント. 空飛ぶ車イス. 木島英登氏の著書「空飛ぶ車イス」を5名様にプレゼント!